



# 朝霞の木

平成29年6月1日  
朝霞市立朝霞第八小学校  
電話：048-465-8381  
男子547名 女子518名 1065名

【学校教育目標】

かしこく・やさしく・たくましく

## 非認知能力を育てる

校長 鈴木 聡

1学期も折り返しの6月を迎えました。子どもたちはすっかり新学年の顔となり、元気に明るく学校生活を送っています。過日、朝の挨拶に立っている時、3月に卒業した四中生徒が通り掛かったので、「中学校生活はどうだい？」と声を掛けたところ、「超楽しいっ！」とすぐさま答えが返ってきました。「小学校が良かった。」としみじみ言われるのも困りものですが、喜々とした表情とあまりの即答ぶりに、「そんなに小学校はつまらなかったのかなあ？」と複雑な思いを持ちながらも、中学校の自由度は責任の裏返し、小学校は少し厳しくらいでちょうどいいと考えたりもしました。

さて、近頃、『非認知能力（スキル）』という言葉をよく目にしたり耳にしたりします。非認知能力は子どもの将来を支える重要な能力になるというので、インターネットで調べてみました。

**非認知能力とは**・・・IQ（知能）に関係なく、忍耐力や社交性、自尊心など幅広い力や姿勢を含むもので、IQなどで数値化される認知能力とは違って目に見えにくい能力をいう。例えば、  
○目標を達成するための「忍耐力」「自己抑制（自制心）」「目標への情熱」  
○他者と協力するための「社会性」「敬意」「思いやり」「誠実さ」  
○情動を抑制するための「自尊心」「楽観性」「自信」「自己肯定力」  
などがそれに当たる。OECD（経済開発協力機構）では「社会情動的スキル」と言い表される。

学校生活の中で非認知能力をとらえると、「学びに向かう力や姿勢」と言い表すことができます。算数の問題を解く場面を例に考えると、問題を解くには、授業の内容を理解したり公式を正しく憶えて適切に活用したりといった「認知能力」が求められます。しかし、学習内容の習得にはそれだけでは不十分で、理解できるまで根気強く学習に取り組んだり、友達と教え合って理解を深めたりするといった非認知能力の支えが必要となります。学年が上がり学習難易度が高まるにつれて、非認知能力は子どもの学習や諸活動を支える大きな要素になりそうです。

学校教育における非認知能力の育成は、今までも特別活動の中でねらいをもって取り組まれてきました。認知能力と非認知能力は絡み合うように伸びると言われるので、非認知能力を育てる視点を教科指導に位置付けたり、学習環境を整備したりすることは十分に可能と考えます。

私は、昨年来、機会を捉えては子どもたちに「自分に挑戦しよう」と話してきました。今年は、言葉を“having a go! やってみなよ!”と変えて子どもたちに伝えていきます。私は言うばかりで、直に子どもたちを支えてくれているのは学級担任や保護者の皆様になるのですが、1年間伝え続けますのでご支援を宜しくお願いします。

子どもの挑戦が成功裏に終わり、褒めてさらに伸ばすことが一番の理想ですが、そうばかりとは言えません。主体的な取組が失敗に終わったり、周囲を不愉快にする言動を取ったりすることもあります。現実はいまうまく進まないことのほうがずっと多いものです。その時は、それらの失敗を糧にできるように言葉を掛けていただきたいのです。私は、基本的に子どもは間違える存在であると捉えています。ですから、学級担任になると決まって子どもたちに話していたのが、「教室は間違えてもよいところ」ということです。始めのうちは子どもの発言を引き出すために学習場面で遣っていました。それが、思いやりや言葉遣いなどの対人スキル（非認知能力）も含めて間違えてもよいところと徐々に捉えるようになり、子どもたちともよく話しました。

「最大の教育環境は教師」、があります。「親の背中を見て育つ」という言葉もあります。私たち大人自らが非認知能力を十分に発揮して子どもたちに届けることが、子どもの非認知能力を育てる上では一番のことと考えます。